

平成22年10月19日 【火曜日】

増毛山道の会と留萌振興局

山道の利用で意見交換

小杉測量設計ら会員44人参加

岩尾別列

【留萌発】NPO法人増毛山道の会と留萌振興局は十六日、「増毛山道別列と岩尾ルート利用検討会」を開催した。主催者のほか、石狩市、増毛町、旅行者などから四十四人が参加。同会唯一の法人会員である小杉測量設計(株)（留萌、小杉忠利社長）や個人会員などが復元した山道を実際に歩き、今後の維持や観光利用について意見交換した。増毛山道は、安政四年（一



（八五七年）に伊達林右衛門が開削した増毛町別列と石狩市幌を結ぶ三十七キロの

うち、国道に吸収された部分を除く二十七・八キロの山脈を貫く道。百五十年の歳月を経て、三キロを越すクマザサの中に埋没。この地に生活し道を通った古老達も九十歳を超え、山道は記憶の彼方に消え去ろうとしている。こうした状況をしのぶ有志らは平成二十年十二月、「増毛山道の会」を結成。歴史、文化、自然等の調査研究と復活に向け、地権者等と交渉しながら山

道の復元を進め、今年七月、百年ぶりに別列と岩尾ルート約十六キロが開通した。この日は、会員ら四十四人が別列側から八キロを五時間かけて実際に歩き、今後の活用方法などを模索。険しさを増していく道中、

現在では使われていない一等基準点「写真」、郵便物を運ぶ遞送人の住居で旅人の宿泊にも利用された駅通跡など、蝦夷地開拓時代の痕跡を目の当たりにした参加者は歓喜に沸いた。このあと、増毛町内にある暑寒沢自治会館で今後の

維持や観光利用について意見交換。「歴史的背景を観光客にどう伝えるか」「山道の各入口に至る林道が一部崩落するなど安全面から整備が必要」「地域資源としてはかりしれない可能性を秘めており、海外からの観光客も見込めるのでは」

などの意見が出され、「なんとか石狩幌までの残り区間の復元を実現したい」と涙ながらに訴える会員も。同会は今後、留萌振興局など行政機関と協議を進め、増毛山道の利用方法を検討していく。